

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520042

研究課題名(和文) ダーウィン主義時代における現象学的人間学の科学論的意義

研究課題名(英文) Modern Scientific Significance of the Phenomenological Anthropology in the Era of Darwinism

研究代表者

音喜多 信博 (OTOKITA, Nobuhiro)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：60329638

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究において私は、ダーウィン主義の時代とも呼べる今日、M・シェラーを中心にして、主に20世紀の前半に展開された現象学的人間学がどのような科学論的意義を有しているか、再評価することを試みた。研究の手順としては、まず、現象学的人間学を代表する哲学者たちが、進化論に対してどのような態度をとっていたのかということについて、原典資料に基づいて歴史的な整理をおこなった。つぎに、現象学的人間学と、進化論の成果に基づいて認識論や倫理学を構築しようとしている現代の「進化論的認識論」、「進化倫理学」との比較・対照をおこない、両者の類似性と差異を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this research, I tried to re-evaluate modern scientific significance, in the era of Darwinism, of the phenomenological anthropology that had been deployed in the first half of the 20th century, by Max Scheler and other several philosophers. The outcomes of the research were the following. First, I examined historically, on the basis of the original text documents, what attitude philosophers representing the phenomenological anthropology took toward the theory of evolution. Then, I compared the phenomenological anthropology with the contemporary “evolutionary epistemology” or “evolutionary ethics” that are trying to build the epistemology or ethics, based on the results of the theory of evolution, and made clear their similarities and differences.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：現象学 哲学的人間学 シェラー メルロ＝ポンティ ゲーレン カッシーラー 進化論

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初において、具体的に「現象学的人間学」ということで念頭におかれていた哲学者は、M・シェラー[1874-1928]、M・メルロ=ポンティ[1908-1961]、A・ゲーレン[1904-1976]らである。(ゲーレンは、厳密な意味では「現象学者」ではないが、シェラーに大きな影響を受けており、シェラー人間学の実質的な継承者であると言えるので、ここに含めた。)

これらの哲学者たちは、当時最新の生命諸科学(ゲシュタルト心理学、動物行動学、神経科学など)との対話をとおして自らの人間学思想を形成してきたわけだが、それらの生命諸科学の背景には、当時勃興しつつあった進化生物学が存在した。しかしながら、これらの哲学者たちが進化論に対してどのような態度をとっているかということについての研究は、これまでほとんど存在しなかった。

現象学的人間学は、それが参照している経験諸科学の成果が古いものとなったがゆえに、今日では時代遅れの思想と見なされがちである。現象学的人間学の哲学者たちは、とくにダーウィニズムが内包していると(彼らによって)考えられた機械論的な「適応万能主義」に対して批判的であった。しかし、今日では、進化生物学の「適応主義」はそれ自身が検証や反証を受け付ける仮説ではなく、一種のリサーチ・プログラムとして捉えるべきだという考え方が、科学哲学の分野では定着してきている(Sterelny & Griffiths 1999; Sober 2000)。そのため、一見したところ、現象学的人間学の進化論批判のモチーフは、もはや現代においては通用しないものと思われるのである。

私は、本研究において、現象学的人間学に対するこのような評価が本当に正しいのか、再考してみたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的としては、大きく分けてつぎのふたつがある。

(1) 現象学的人間学の哲学者たちによる進化論批判についての歴史的概観

シェラー、メルロ=ポンティ、ゲーレンは、それぞれ別の年代に活躍した哲学者たちであり、当然、当時進化生物学がどの程度発展していたかによって、その進化論理解に違いが出てくる。私は、こういった進化生物学の発展状況をも考慮に入れたうえで、彼らの議論をまずは歴史的に概観することとした。

一例をあげてみよう。『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』(1913-16年)のシェラーは、J.v.ユクスキユルの「環境世界論」を引きながら、生物体が既成の環境に一方的・受動的に適応させられていくというダーウィニズムの考え方を批判した。シェラーによれば、生物主体の身体の構造と環境世界とは厳密に相即の関係にあり、進化のプロセスにおいては両者が同時に形成される。

したがって、進化のプロセスとは、生物が純粹に受動的に既定の環境に適応させられるということではなく、生物の能動的活動自体が、進化の過程で一定の重要な役割を果たすのである。さらに、メルロ=ポンティは、晩年の存在論的考察のなかで、とくに発生生物学の成果を参照しながら、進化の過程における環境要因が果たす役割の重要性を強調して、遺伝子還元主義に対して警鐘を鳴らしていた。

さらに、ゲーレンは、L・ボルクの「胎児化説」やA・ポルトマンの「生理的早産説」などを参照しながら、人間の進化についての独自の仮説を提唱した。つまり、人間の知能の進化は、身体的なネオテニー化によって増大した負担を軽減するためのものであり、これこそが他の動物とは異なる人間の「世界開放性」(シェラー)を生み出す動因となったというのである。

総じて見ると、現象学的人間学の哲学者たちのダーウィニズム批判は、ダーウィニズムが内包する適応万能主義や機械論的生体観を批判して、生物主体の能動的活動性や、生物主体と環境との相互作用性を強調するという共通点をもっていると言える。本研究においては、まずはこういった現象学的人間学の進化論批判について、歴史を追って概括的な整理をおこなうこととした。

(2) 現象学的人間学の現代的意義

さて、ともすれば現象学的人間学の哲学者たちは、上記のような批判をおこなうことによって、ダーウィニズム全体を拒否してしまうというような傾向性をもっていた。しかしながら、今日の進化論的研究においては、彼らが提出したような批判をも取り込むかたちで議論が進んでいることに注意しなければならない。

たとえば、進化論的認識論の創始者とも言えるK・ポパーは、シェラーと同様に、進化において、生物の能動的行為が果たす役割を重視する立場をとっている(Popper 1984, 1987)。ポパーは、「適応」とは生物が純粹に受動的に既定の環境に適応させられるということではなく、生物が所与の環境に対して柔軟に対応していくこと(たとえば食物の好みが変わること等)が、自然選択においてどのような個体が選択されるかということに大きな影響をあたえると見ていた。今日でもF・M・ヴケティツらの進化論的認識論者たちは、システム論を援用しながら同様の考え方を表明している(Wuketits 1990)。

さらに、今日では、進化生物学の中心的な理論的前提である「遺伝子選択説」の対案として、発生的環境の重要性を主張する「進化発生学(evo-devo)」とそれを概念的に発展させた「発生システム論(DST)」と呼ばれる理論が注目を集めている(Sterelny & Griffiths 1999; 戸田山 2009)。これらの理論によれば、遺伝情報の発現は、遺伝子の既

定の情報が一方的に展開されるといったものではなく、遺伝子と細胞内外の環境(タンパク質の存在など)との間の複雑でシステムティックな相互作用によってはじめて成し遂げられるということが明らかになりつつある。とすれば、親の世代から子の世代へと遺伝するのは、単に遺伝子だけではなく、遺伝子をも包摂する環境全体であるという見方も成り立ちうる。それが正しければ、メルロ=ポンティが予言したとおり、自然選択とは遺伝子のみにはたらく機械論的な過程であるという古典的なイメージは、修正を余儀なくされるであろう。

もちろん、現象学的人間学の哲学者たちの人間観(とくにゲーレンのそれ)のなかには、進化と遺伝子との関連について新しい知見が次々と生まれている今日においては、もはや科学的に通用しないものも含まれている。しかしながら、その進化論批判のモチーフそのものは、じつは現代にも通じるものであると、私は考える。このような観点から、本研究においては、現象学的人間学の先駆的な科学論的意義を再評価することを目標とした。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者が単独でおこなう研究であり、文献資料の読解と分析、および研究成果の口頭発表・論文発表というかたちで遂行された。

4. 研究成果

本研究の成果は、おおまかに以下の(1)~(4)に分けられる。

(1) 現象学的人間学による進化論批判についての歴史的概観

まず私は、現象学的人間学を代表する哲学者たちが、進化論に対してどのような態度をとっていたのかということについて、概括的にまとめるという作業に従事した。以下、2点に分けてその詳細について説明する。

適応万能主義に対する批判と人間の特殊性

現象学的人間学者たちが進化論に対して直接に言及している箇所は、あまり多くはない。しかし、シェラーは『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』などにおいて進化論的自然主義の価値理論に対して批判をおこなっているし、『宇宙における人間の地位』(1928年)においては、進化生物学による系統進化の年代的記述に対して、あえてアリストテレス的な「生命の階層」の本質記述を対置させている。シェラーは、ユクスキュルの「環境世界論」に影響を受けて、生物体が一方的に物理的環境に適応させられるという進化論の機械論的な考え方を批判し、行動主体としての生物体と環境世界の一体性を強調している。そして、他の動物が種に固有の「環境世界」に拘束されているのに対して、人間はこのような環境世界をもたず「世界」に開かれているとの主張をおこなっ

ている。このような進化論の「適応万能主義」に対する批判と、他の動物と比較した場合の人間の特殊性の強調というライトモチーフは、程度の違いはあれ、メルロ=ポンティの『行動の構造』(1942年)やゲーレンの『人間 その本性および世界における位置』(1940年)にも継承されている。メルロ=ポンティは人間の行動の開放的性格を行動の「シンボリック形態」と名づけたし、ゲーレンは人間独特の生理学的・解剖学的未規定性から、行動における開放性を導き出そうとした。このような意味において、現象学的人間学の哲学者たちは、進化生物学者たちとは異なり、人間と他の動物との間の質料的な連続性よりも、その行動形態における形相的な不連続性を強調することとなったのである。

メルロ=ポンティの発生学解釈

晩年のメルロ=ポンティは、1959-1960年のコレージュ・ド・フランスでの講義(*La Nature - Notes, Cours du Collège de France*)において、生物と環境との相関性をより詳細に研究するために、H・ドリーシュの発生学や、進化論と発生学とを結びつけようとするF・メイエ、R・リュイエらの理論を参照している。これらの理論は、遺伝子が発現するための「環境」の重要性を強調する。つまり、発現とは、遺伝子にあらかじめ記録されているプログラムが一方的に読み取られていくといったたぐいのものではない。そうではなくて、遺伝子の発現を引き起こす情報が細胞内外の環境のなか存在し、遺伝子はそれらとの相互作用によって、その環境に適したプログラムを実行していく。つまり、遺伝子と環境とは不可分の全体的システムあるいは「場」を形成しているのである。メルロ=ポンティにとっては、このような発生学の考え方は、古典的なダーウィニズムの機械論的な生体観に疑問を突きつけるものであった。この意味において、後期のメルロ=ポンティの思想は、先述の「進化発生学」や「発生システム論」における議論を先取りするようなものであったと言える。

(2) 現象学的人間学と進化論的認識論

つぎに私は、現象学的人間学と進化論的認識論との比較をおこなった。進化論に基づく認識論は、動物の知覚と行為の機構を適応の産物とみなす。つまり、それらは(個体の)生存の維持と生殖の成功にとって有用であるから進化してきたとみなす。したがって、進化論的認識論は、真なる認識の基準を「有用な行為へと導く判断を形成する」ということによって規定しようとする点において、プラグマティズムと共通している。私は、哲学的人間学の認識論、とくにシェラーのそれは、このような進化論的認識論と何を共有していてどこが異なるのか、ということの検討をおこなった。

進化論的認識論の立場に立つポパーやヴェケイツによれば、生物体の知覚と行動はト

ライアル・アンド・エラーの情報処理過程であり、生命的課題に対する創造的な対処の過程である。これと類似した立場は、「認識と労働」(1926年)におけるシェーラーの行為的認識論(「衝動的-運動型の知覚論」)においても表明されている。そのなかでシェーラーは、プラグマティズムの哲学者たちから影響を受けつつ、人間の知的認識の根底に、生命的衝動に規定された身体的知の層が存在することを、現象学的に明らかにした。

シェーラーの行為的認識論は、伝統的な主知主義的哲学における知性偏重の認識論を批判して、身体的行為としての知覚を基盤に据えようというものである。一方でシェーラーは、「感覚所与」を一切の知識の基礎と見なす経験主義的な認識論をも、つぎのような理由から批判している。経験主義における「感覚所与」は、人間が外界から受動的に受け被るだけの要素的なものと考えられている。しかし、現実の知覚とはそのようなものではなく、ゲシュタルト心理学やユクスキュルの環境世界論が示したように、生命的・実践的意味を担った能動的なはたらきである。以上の点において、シェーラーの行為的認識論は、進化論的認識論の生物学的プラグマティズムに近い側面をもっている。(同様の研究動向は、メルロ=ポンティ『知覚の現象学』(1945年)やゲーレン『人間』の認識論にも継承されている。)

しかしながら、シェーラーは、生物学的なプラグマティズムと自らの理論を同一視しているわけではない。彼は、プラグマティズムの真理概念、すなわち真なる認識の基準を生存への有用性ということによって規定しようとする考え方を否定して、つぎのように述べる。プラグマティズムの「生存の用」の考え方があてはまるのは、あくまで知覚的な「知」(Wissen)に関してのみであって、真偽が問題となる「認識」(Erkenntnis)の場面ではプラグマティズムは妥当しない。知覚的知のレベルでは「真-偽」の区別は存在せず、「明証的-非明証的」、「十全-不十全」の区別が存在するのみである。それに対して、認識のレベルでは、命題や判断の内容が事態と一致しているかどうか問われるのであり、そこでは単なる生物学的有用性には還元できない固有のはたらきが存在している。シェーラーによれば、プラグマティズムは、自らの理論が適用されるべき範囲を誤って拡張しているのである。

そのような越権行為の背景には、近代以降の社会が、知の特定の形態のみを特権的なものと見なしてきたという知識社会学的問題が存在する。シェーラーは、人間の知の三形態(支配知・作業知、教養知、救済知)を区別している。それらの知は相互に他で代用されることはできず、また後者ほどより高い目標とみなされるといって客観的位階が存在するが、プラグマティズムは支配知・作業知のみに定位してしまっている。以上のような観

点から、たとえば形式論理学のアプリオリな真理を「生存の用」へと還元するような単純なプラグマティズムは否定されるのである。

(3)現象学的倫理学と進化論的倫理学

一般的な理解では、シェーラーの価値倫理学は、現象学に基づいた「アプリオリ主義」あるいは「絶対主義」を唱えるものであって、進化生物学などの経験科学による道徳の説明を一切拒否する議論であるかのように考えられている。しかし、私は、このような評価を見直す必要があると考え、以下のような研究に従事した。

『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』のシェーラーは、価値は知的認識の対象である以前に、感情的に感得されるものであるとしている。さらに、人間が感得する価値には、精神的価値以前に感性的価値や生命的価値が存在するとしている。したがって、シェーラーは、人間においても生物学的レベルでの価値が存在することを認めている。しかし、一方でシェーラーは、進化論が価値一般を生命的価値へと還元してしまうことを批判し、感性的価値、生命的価値から精神的価値、聖価値までもを包括的に捉える階層的な価値理論を提唱した。そして、精神的価値や聖価値が下位の価値から自立しており、それらを基礎づけているとの主張をおこなっている。シェーラーの立場は、現代の用語でいうならば、遺伝的進化に対する文化的進化の自立性を強調する立場であると言ってよい。

さて、今日、道徳の起源についての進化倫理学的研究によって、道徳も進化の産物と考えられるようになってきた。そこから、道徳についてのメタ倫理的な主張、すなわち非実在論や非認知主義や主観主義が導出されることがしばしばある(Ruse & Wilson 1986; 田中 2010)。そこにおいては、道徳をめぐる問題は感情的な共感能力の問題に帰され、道徳的命題は主観的な感情の表出や、他者の行為を促す指令のようなものと解される。

このような議論の状況をふまえながら、私は、進化論をふくむ価値の「自然主義」に対する批判という観点から、シェーラーの価値倫理学の現代的意義を検討した。具体的には、進化論から帰結するとされる「主観主義」や「相対主義」を、『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』の時期におけるシェーラーがいかに批判しているか、ということに焦点を当てて考察をおこなった。その結果、つぎのようなことが明らかになった。アプリオリ主義や絶対主義を標榜するシェーラーの価値倫理学は、道徳的価値についてのある種の実在論・認知主義・客観主義であると言える。しかし、厳密に言えば、シェーラーの議論はそれほど単純な分類を許さないものである。つまり、メタ倫理学の議論において通常は両立しないと考えられている道徳の

起源としての「理性」と「感情」、価値の「実在性」や「客観性」と「相対性」とが、シェーラーの現象学的な価値理論においては両立しているのである。

たとえば、シェーラーが、人間において道徳的価値は「感得」と言っているときの「感情」は、理性によって介された感情である。また、シェーラーにおいては、価値はそれを感得する主体に「現存在相対的」である(たとえば生物の種によって何を価値あるものと見なすかは変わってくる)のだが、だからと言って、価値は主観によって恣意的に構成されるのではないという意味において、実在性や客観性をもっているものとされているのである。

(4)カッシーラーによる現象学的人間学に対する批判

さて、本研究の遂行期間の途上において、当初の研究計画にはなかった課題に取り組みざるをえなくなった。それは、シェーラーと同時代に活躍した新カント学派の哲学者 E・カッシーラーのシンボル形式の哲学についての研究である。カッシーラーは、シェーラーの哲学的人間学を批判的観点から検討しており、カッシーラーについて研究することが、外在的な立場から現象学的人間学の意義を検討するうえで有益であると考えられた。(なお、このような研究テーマの追加は本研究全体の目的を大きく変更するものではない。)

カッシーラーのシェーラー批判

まず私は、シェーラーの哲学的人間学に対して批判的な観点から見解を述べているカッシーラーの草稿「シンボル形式の形而上学へ向けて」(1928年執筆終了)についての研究をおこなった。そのなかでカッシーラーは、シェーラーの形而上学に内包されている「精神」と「生命」の実体論的二元論を批判している。カッシーラーによれば、「精神」とはあくまで「生命」が自己を再帰的に振り返る機能のことであり、その際、生命が自己と向き合う媒体となるのが「シンボル」である。私は、シェーラーの人間学は、このような媒体の存在に無自覚であったために性急な形而上学へと移行していったのではないか、という観点から批判的な検討をおこなった。とくに、シェーラーの人間学に言語についての考察が欠けていることは、大きな欠陥であると考えられた。

「シンボル」概念のもつ意義

『シンボル形式の哲学』第3巻「認識の現象学」(1929年)におけるカッシーラーは、シンボル形式として神話、言語、理論的認識(自然科学)をあげているのであるが、これらはすべて、人間の「生命」が再帰的に自己自身と向かい合うための媒体であるとしている。カッシーラーは、カントと同様に認識の発展の最終形態を数学的自然科学のなか

に求めながらも、神話や言語に対する自然科学の特権性は否定し、それぞれのシンボル形式を人間精神の発展の不可欠の段階として捉えている。このように考えることによって、人間の生物としての自然性を認めつつも、同時にその自然性を再帰的に捉えることによって、精神の合理性へと統合していくという人間の特殊性をも説明できる。同様に、『人間』におけるゲーレンは、人間の知覚から言語、真理の認識までを一貫したシンボル形成的な機能として捉えている。さらに、『知覚の現象学』のメルロ=ポンティは、シンボルの問題を身体論の文脈で考察し直し、人間の身体的行動をシンボル産出の場として捉えている。以上のように、「シンボル」という概念を導入することによって、自然的な知覚から悟性的判断までを一貫した人間学的観点から捉え直すことができる。ここでは、もっとも基礎的、受容的なものと考えられている知覚のレベルにおいて、すでに人間の認識の能動性や規範性がはたらいっていると思なされる。そのことによって、シェーラーが唱えたような「精神」対「生命」の対立図式や、現代の認識論や倫理学においてしばしば取り沙汰される「合理主義」対「進化論的プラグマティズム」といった対立図式を乗り越えることが期待されるのである。

(5)今後の展望

本研究において私は、主に20世紀前半に展開された現象学的人間学と、今日の進化論的認識論や進化論的倫理学とを対比させて検討してきたのであるが、両者を単に並行的に比較するにとどまった感がある。たしかに本研究によって、現象学的人間学が今日の進化生物学の成果を取り入れた認識論や倫理学を先取りするようなものであったことを示すことができた。しかし、研究が進展してくるにつれて、つぎのような点において、本研究での考察だけでは不十分であると思われるようになった。

シェーラーやカッシーラーにおいては、哲学的人間学の提示する人間観(「人間とは何か」と倫理学(「人間はいかにあるべきか」とは切り離すことができないものとされている。ここで哲学的人間学が目指していることは、自然科学的人間観と並び立つひとつの事実的な人間像を提示することではなく、自然科学的人間観をもそのなかに包摂するような「規範的な」人間観を示すことであろう。本研究においては、この点についての考察が不十分であった。

哲学的人間学のこのようなあり方は、人間本性についての一種の目的論的理解をほらんだ本質主義であり、自然科学における「自然」ではなく規範的に了解された限りでの「自然」に定位した自然主義であると言える。その意味において、近年の英米圏の「徳倫理学(virtue ethics)」における「アリストテレス的自然主義」(Hursthouse 1999; Foot 2001)と称される研究動向と軌を一にしてい

ると言えるのではないだろうか。

もしそうであるとするならば、現象学的人間学は現代の英米圏の徳倫理学と生産的な対話をおこなうことが可能となるであろう。しかしそれは同時に、アリストテレス的自然主義に対して提出されているさまざまな疑義にさらされうるということをも意味している。本研究の成果は、今後、このような観点からさらに展開されるべきであると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

音喜多信博、E・カッシーラー『シンボル形式の哲学』第3巻「認識の現象学」における「シンボル」概念 その現代的意義についての予備的考察、アルテス・リベラレス、査読なし、第95号、2015、pp.1-14、<http://ir.iwate-u.ac.jp/dspace/bitstream/10140/5451/1/al-no95p1-14.pdf>

音喜多信博、E・カッシーラー「シンボル形式の形而上学」より見た哲学的人間学、東北哲学会年報、査読あり、第30号、2014、pp.83-103

音喜多信博、アルノルト・ゲーレンの知覚論と言語論、思索、査読あり、第45号(2)、2012、pp.279-298

音喜多信博、マックス・シェーラーの価値倫理学の現代的意義 価値の「主観性」と「相対性」をめぐる、フィロソフィア・イワテ、査読あり、第43号、2011、pp.13-27、<http://ir.iwate-u.ac.jp/dspace/bitstream/10140/4646/1/pi-n43p13-27.pdf>

〔学会発表〕(計 2 件)

音喜多信博、E・カッシーラー「シンボル形式の形而上学」より見た哲学的人間学、東北哲学会第63回大会シンポジウム「哲学的人間学と自然主義」提題、2013.10.26、岩手大学(岩手県)

音喜多信博、マックス・シェーラーの価値倫理学の現代的意義、岩手哲学会第45回研究大会、2011.9.3、岩手大学(岩手県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

音喜多 信博 (OTOKITA, Nobuhiro)
岩手大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号：60329638

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし